令和元年度　第69回高知県芸術祭
第48回高知県芸術祭文芸賞

入選作品集

人々が美しく心を寄せ合う中で
文化が生まれ育つ
梅花のように県民の誰もが
明日への希望を咲かせる
時代になりますように

beyond 2020

文化庁

2019年度　文化庁　文化芸術創造拠点形成事業

高知県芸術祭執行委員会

令和元年度　第69回高知県芸術祭
第48回高知県芸術祭文芸賞

入選作品集

文芸賞・文芸奨励賞・佳作

もくじ

〈短編小説〉
芸術祭文芸賞
ノエルのできごと……柴田由……1
芸術祭文芸奨励賞
自立癖……弘瀬誠一……6
少女A……下元真人……11
佳作
鷲尾山山頂にて……曽我部仁志……17
〈詩〉
芸術祭文芸賞
夏の終わり……前田高昌……23
芸術祭文芸奨励賞
白いカーネーション……山本由美……25
西行の夢……千里日月……27
再生……宮本泰子……30
静けさの中で……大野仁志……33
ループ……石川志津……35
佳作
あおいろ……恩田凍羽……37
すだれ……奥村真眉……40
香り……宮地令子……43
あ、友よ……倉橋孝彰……46
ひとり語り……文月奈津……48

〈短歌〉
芸術祭文芸賞……尾崎　淳……51
芸術祭文芸奨励賞……矢野安祐俐・高橋治光・多賀一造
小西海鈴・中山恭子……51
佳作……森澤鼓十・西本明浩・浜田和香子
池知さつき・渡辺倶康・西原時子……53

〈俳句〉
芸術祭文芸賞……島村かりん……55
芸術祭文芸奨励賞……中村竹子・澤村正彦・山崎光子
徳永逸夫・藤田ゆずあ……55
佳作……松村知香・山下正雄・浜田博子
乾真紀子・浜田節・矢田光央
駒木基克・西込とき・小西海鈴……57

〈川柳〉
芸術祭文芸賞……織田裕一……61
芸術祭文芸奨励賞……森本幸美・岡林裕子・桑名知華子
髙橋清花・松谷侑飛……61
佳作……沖すが子・大坪邦枝・近藤糾
熊谷敏郎・西原時子・髙橋治光
川崎夏歩・山本咲愛……63

〈審査評〉……67

〈作品募集要項〉……72

短編小説

ノエルのできごと

高知市　柴田　由

「マリアンヌ・デュモンと申します。短い間になりますが、よろしくお願いします」

所属する書道サークルの新歓コンパで彼女と出会った。一年間、国文学修士課程で国木田独歩研究のために来日したという。フランスの学制はよく分からないが、修士ということは僕より二、三年上ということだろうか。

第一印象はとにかく地味の一言に尽きた。長身で化粧っ気のない顔。ピアスも指輪もしていない。ぼさぼさっとしたまとまりのない金髪。眼鏡は実用一点張りのメタルフレーム。ただ瞳はとても綺麗なブルーだった。

コンパ会場は空調が効きすぎていて、四月末の夜にしては暑かった。彼女は上着を脱いで、グレーの半袖ニット姿になっていた。Vネックの胸の谷間や、長い二の腕には金色の短い産毛が光っていた。白人女性、特にフランス人女性といえばみんなお洒落で、肌の手入れも行き届いた女優のような美人揃いだろうという固定観念があったため、目の前の彼女がいま一つイザベル・アジャーニやロマーヌ・ボーランジェと同じ国の女性ということにピンとこなかった。

みんな酔っぱらって座が乱れた時、それまで自分が座っていた席を他人に奪われた彼女が、僕の隣に来た。

「独歩がフランスで読まれてるなんて意外です」。

話しかけてみた。商学部の僕は、独歩は高校の現国で習った、代表作「武蔵野」という最低限の知識しか持ち合わせていない。

「ミュッセの劇を観る日本人だっているでしょ」と彼女が返してきたが、独歩以上に知らない名前だった。ほかにもいろいろ話したが、酔いもあって内容までは覚えていない。ただ彼女の日本語は

美しかった。地方出身で上京三年目なのにまだ標準語のイントネーションが怪しい自分のよりも彼女の日本語は東京に馴染んでいた。そんなところも一層、彼女がフランス人らしくないように感じさせた。

サークルでは週二回、水曜、土曜に練習会があった。キャンパスに近い神社の広間を会場に借りていた。マリアンヌは欠かさず参加して、いつも片隅で篆刻をしていた。

「筆は持たないんですか？」

「わたしは篆刻専門です。字を書くには紙とか墨とかお金がかかります。篆刻は印刀と石だけですし、一度仕上げてから石を削り直すと再利用できます」

少し恥ずかしそうに彼女が説明した。練習会場に現れる時、彼女の服はたいていシンプルだった。一度、彼女の着ているコットンニットの襟元に新品のタグがついていた。教えてあげると、「取って」と頼まれた。

背中に立って、うなじのところを少しめくってタグをハサミで切り取った。ジーンズメイトの処分品だった。ユニクロはまだ都内には進出していなかったので、余裕のない学生がよくこのチェーン店で服を買っていた。ワゴンセールらしい安い服に、無造作な纏め髪、背筋を伸ばした変に良い姿勢で石を削るその姿がなんともまた地味で、神社の畳敷きの空間に不思議と馴染んでいた。

「東京って意外と緑が多いですね」

梅雨の水曜日、練習会の後にたまたま神田川沿いに高田馬場まで彼女と一緒になった。紫陽花が盛大に色づいている。

「この道は春には満開の桜が綺麗です。桜色のトンネルみたいに花が覆い被ってきます。四月の一週目くらいが一番凄いかな」

「四月ですか？　残念です。わたしは来年の三月には帰国しないといけません」

「そうなんだ。残念です。本当に綺麗なのに」

「でも来年は家族で、母国開催のワールドカップを見に行きます」

サッカーワールドカップが翌年にフランスで開

催だった。Ｊリーグが発足して数年になるが、いまだに国内ではサッカーは野球ほどには社会に浸透していなかった。
「フランスにはプロ野球はあるんですか？」
「詳しくは知りません。日本ほどには人気のあるスポーツではないと思います。そういえば、アパートによく新聞勧誘が来るのですが、洗剤と野球観戦のチケットをあげるから購読してくれってしつこい時があります」
「それで、どうしてるんですか？」
「そういう時だけ日本語が分からないフリをします」
「良い作戦ですね」
　僕は早足のほうだが、特に気を使わなくとも背が高い彼女は同じ早さで歩いている。
「緑もいいけど、僕は海が近いほうがほっとします」
「どこの出身ですか？」
「松山」
「子規と漱石の街ですね」
　即答だった。留学してくるほどだからかなり日本文学には詳しいとは思うが、本気で何かを学んでいる人間の凄さをあらためて感じた。そんな研究生活の合間を縫って、マリアンヌは練習会に顔を出し続けた。

　駅構内の売店から有線の音楽が流れてくる。「ワム！」の「ラストクリスマス」だ。耳にするのはきょう何度目だろう。
　イブにしか予約できなかった高速バスで実家に帰ろうとしたら、地下鉄の人身事故で発車時刻に間に合わなかった。八重洲口にある公衆電話から実家に電話する。恐ろしい早さでテレカの度数が減っていく。電話口で母親が、もういくらか振り込むから飛行機なり鉄道なり帰れる便で帰っておいでという。その言葉に涙が出そうになった。とりあえず今夜はアパートに戻ることにして、電車に乗った。車内はいつもよりカップルが目立った。
　乗り換えの四谷のホームで肩を叩かれた。相手

の顔を見る。その華やかな笑顔にマリアンヌと認識するのに数秒必要だった。
「見違えますね」。失礼にもうっかり口走ってしまった。それくらい普段とは雰囲気が違っていた。欧米女性にとっては化粧は文字通り「ｍａｋｅ」、作り上げるものらしい。
「眼鏡もしてないし別人かと思いました」
「ミサに行った帰りなので、いつもより少しきちんとしています」
コート姿で彼女はくるりと一回転した。
「ミサ？」
「上智大学に行ってました」
上智大キャンパスの聖堂で行われるクリスマスのミサは、そこの学生でなくても出られるということだった。
「いつもそんなふうにしていればいいのに」
「秘すれば花と申します」
マリアンヌは少し照れたように笑った。彼女によると、公費留学の身分なので普段は質素にしていないと他の留学生に陰口を叩かれるのだそうだ。
「家も裕福ではありません。祖父はもともとユーゴスラヴィアからの移民です。父も無理をしてわたしを大学に行かせてくれました」
来日してから一度も帰国していないし、年末年始も東京で一人過ごすということだった。
「淋しいですね」
「だから、来年家族でワールドカップを観戦するのを凄く楽しみにしています」
どこからか聞こえていた山下達郎が鳴り止むと、今度はマライア・キャリーに変わった。
「賑やかですね日本のクリスマスって」
「フランスではどうなんですか？」
「もっと儀式色が強いです。ただ、わたしはカトリックですが祖父は東方正教会だから、家族で何かする夜ではなかったです」
マライアが終わると、今度はジョン・レノンだった。「きみが望めば、戦争が終わる」というフレーズが響く。
「夕飯食べました？」。彼女に聞く。こんな夜

にアパートに帰って一人コンビニ弁当もないだろう。
「まだです」。心なしか嬉しそうだった。
「僕もまだです。どこか入りましょう」
四谷は凄い人混みだった。だいたいどの店も満席で、ようやくチェーン展開しているスパゲティ屋に入れた。
「今日ぐらいは許されるかな」
そうはにかみながらマリアンヌは赤ワインのカラフェを注文した。次から次へと客が入ってくるので、半ば追い立てられるように店を出た。駅へ戻る人混みで、彼女は誰かにぶつかられた。弾みで右目のコンタクトを落としたらしいが、探しようがなかった。
「大丈夫ですか？」
そう声を掛けると、照れ臭そうに彼女は右手を差し出した。ワインのせいもあるのか頬が上気している。
「手、引いて下さい。見えなくて歩けません」
人を押し分けながら駅まで歩いた。
改札口で少し立ち話になる。
「あなたは優しいですね。練習会でも一番話しかけてくれました」
特に意識していた訳ではない。ただなんとなく、ぽつんと一人で練習場の片隅にいる彼女が気になってはいた。
会話が途切れた。体を小さなリズムで揺らしながらマリアンヌは何かを待っていたようだが、やがて「あ、レンズありました。目の中でずれてただけみたいです。それでは、お休みなさい」と言った。
「うん、お休みなさい」。そう僕が答えると、彼女がハグしてきた。良い香りがする。「ジョワイユーノエル（メリークリスマス）」。僕の耳元で囁くと、彼女はさっと改札の向こう側に行ってしまった。
コンタクトがずれたのなら痛いよな。
帰りの電車の中でふと考え、一つのことに思い当たった。本当は「部屋まで送ります」の一言を期待されていたんじゃないか。
年が明けた。練習会場で会うマリアンヌは元の

地味な彼女だった。あと二カ月と少しで帰国して、夏には家族でサッカー観戦に行くのだろう。僕は何かを変えられるタイミングを逃した気分のまま、就職活動が始まる。

自立癖

高知市　弘瀬誠一

もたれ合うように、同じ造りの平屋が狭い路地にひしめくその地区は一昔前の昭和そのもの。いつの間にか、年寄りばかりが暮らすようになっている。誰が言い出したか、『年寄り長屋』とはうまく言ったものだ。おかげで住人の出入りは滅多にない。あるとすれば、救急車に乗せられたまま帰ってこず、相変わらずの年寄りがまた住み始める。そんな繰り返しが続いていた。

わたしの家の二軒隣に名刺のような表札が貼りつけられた。『杉本艶子』とあり、彼女はすぐに『ツヤさん』となった。厚化粧に派手な着こなしはそう呼ぶにぴったりの女性で、一目で玄人さんと分かる。といっても夕暮れ時に出かける様子はなく、元の住人が残していった玄関先の花に水をやったりしている。

そのツヤさんには、月に二、三度現れる夜の訪問者がいる。彼女より幾分若く、いつもネクタイを締めた身なりのよい初老の男で、いつとはなしに、「若いツバメに違いない」ということにされている。

ある日の夕暮れ時、煙草を買おうと表に出たところにツヤさんが駆け寄ってきた。

「あの男の後をつけて。ほら、黒い背広の」

今にも路地の片隅に消えてしまいそうな男の背を指差した。顔は見えなくとも、例の若いツバメだと察しはついたが、せいぜい挨拶をするぐらいの彼女に言いつけられるようなことではない。戸惑いの顔を向けるわたしに、「早く、見えなくなっちゃうだろ」と当然のような顔をして急かす。

結局、彼女の言い様に圧倒され若いツバメの後を、つまり尾行することになってしまった。

年寄り長屋の路地は、随分と時間のかかる踏切へと続いている。難なく若いツバメに追いつけた。しかし尾行といっても、タクシーにでも乗られたらどうすればよいのか、そんなに簡単な役目ではない。だいたい、なぜこんな真似をしなくちゃいけないのか、近所の婦人に頼まれる力仕事とはわけが違う。若いツバメの後を歩きながら、まだぐずぐずと筋違いな俄か探偵役をためらっていた。

ツヤさんの早口な説明によると、新築したという若いツバメの家を突き止めたいらしい。なぜそんな必要があるのか、家を買い与える程の経済力があるようには見えないが、なけなしの金を騙し取られたのかもしれない。それとも別れ話の縺れでもあったのか。

若くはない男と女の修羅場を思い浮かべているうち、妙に興奮している自分に気づいた。さっきまでの戸惑いも、ツヤさんへの同情や好感へと変わっていく。男と女の関係など、とうの昔に何処かへ置き去りにしたわたしではあるが、彼女の行動は、醜く映ろうともどこか羨ましくも思えてくる。

若いツバメの行き先は直ぐに知れた。タクシーに乗る必要などない隣町で、建築用の足場がまだ

残っている真新しい家に入って行った。所番地も突き止めなくては尾行にならないだろうと、探偵役を躊躇していたにしては変な義務感が湧く。
不意に話し声が聞こえ、若いツバメと大工らしい男が表に出てきた。顔を見られてもそ知らぬ顔をすればよいはずだが、なぜか慌てて隣にあった中華料理店に飛び込む。
「中華まん、ひとつください」
咄嗟にそう言い、ひどく店主を驚かせてしまった。
年寄り長屋に戻る頃にはもうすっかり暗くなっていた。明かりが点いたツヤさんの家の前に立ち、何と声を掛ければよいのか迷ってしまう。
「こんばんは」
結局そう言うのが自然だろうと、彼女が出てくるのを待った。
「ご苦労さま」
派手好きなのは分かっていても、少々抵抗のある花柄のワンピースに着替えていたツヤさんだった。
通された居間にはほとんど家具らしき物はなく、ただ丸いちゃぶ台が置かれ、薄い青色のガラスコップが涼しげに小さな簀の子の上に乗せられていた。
「変なことお願いして、ごめんなさい」
強引に探偵の真似をさせたにしてはしおらしい。うつむき加減に、赤いマニキュアの指で麦茶を入れてくれた。
コップに口をつけるわたしを眺めていたツヤさんだったが、ふいと気だるそうに身をくねらせ横座りになった。花柄のワンピースは下着と変わらないほど薄地で、肉のかたまりのような臀部が妙に生々しい。
一向に尾行の結果を聞こうとはしない。むき出しになったふくらはぎを摩ったりする。そんな取ってつけたような仕草は、やはり、あの若いツバメに縁を切られたからだろうか。どうしようもない老いの惨めさが身に染みているのかもしれない。だとしても、このまま黙っているわけにもいかない。

「頼まれたことだけど」
そう言って、何か書くものはないかと文字を書く真似をしてみせた。くどくど説明するよりかは、地図でも描けば役目はすぐ終わる。気まずく麦茶を飲むこともない。簡単な隣町の図を描き、覚えていた中華まんを買った店の屋号を付け足した。
「その店、知ってるよ」
ツヤさんの目が輝いた。正座に座り直し覗き込む。ワンピースの襟元が広がり、染みだらけのたるんだ乳房が覗いた。
目のやり場がない。お互いに歳を取ってはいても、見とれていると思われるのは気恥ずかしい。胸元から目をそらせば、うふふ、と意味ありげに笑った。これ見よがしに胸を揺らしもする。どうしようもなく、また視線が行く。
「あら、それって、その店の中華まんよね」
ちゃぶ台の影に置いてあったのをツヤさんは目ざとく見つけた。
「つい買う羽目になって」
「悪いわね、お土産まで買わせてさ」
遠慮する様子もなく、ツヤさんは中華まんに手を伸ばした。
「あたし、これでも若い頃は、お店を切り盛りしてたんだよ」
両手で中華まんを半分にしながら自慢げに言い、餡がついた親指を口に含む。厚化粧でも隠し切れない皺を目尻に寄せ、また意味ありげな含み笑い。あっけに取られるわたしの口元に、半分にした中華まんを突き出すツヤさん。可愛いと言うには抵抗があるが、それでも似たような感情が湧く。
「ビール、飲もうよ。ねっ」
返事も聞かず、よっこいしょ、と立ち上がるツヤさん。もちろん谷間も覗かせる。
ツヤさんの心の内が匂う谷間だった。そう気づきながらも、ちゃぶ台の前に座っているわたしでもあった。情をなくした者と、諦めていた者とが、ちゃぶ台を挟み傷口をなめ合おうとしている。そんな感触が侘しく辛い。

「頼まれたこと、もういいのかい？」と言ったのは、ツヤさんの気をそらすため。もっとましな夜だってあるはずだ。
「こっちの方が、いいだろ」
怪しく頬を紅潮させたツヤさんはまた胸を揺らす。ぽちゃん、ぽちゃん、と音がし、真っ青なアイシャドーがわたしをなめまわす。それでも応えられない。息苦しいほどのやるせなさに、思わず立ち上がった。
「どうしたのさ。あたし、そんなに魅力的？」
どう勘違いをしたのか、今度は大きな腰まで揺すってみせる。
「帰るよ。ご馳走さま」
わたしの返事にツヤさんの顔色が変わった。
「なに言ってんだい！ビールぐらい呑んでいったって罰は当たらないだろ。ふん、どうせ色惚けババアとでも思ってるんだろ。あんただっていい歳じゃないか、お高くとまるんじゃないよ」
「そうじゃないって」
そう応えてはみても続ける言葉が出てこない。ツヤさんのにらみつける目が愛おしく哀しく、寝付けない夜となってしまった。
次の日からツヤさんを見かけなくなった。名刺のような表札は剥がされ、玄関先の花も枯れかかっている。身内の話など聞いたこともなく行方を捜そうにも手の打ちようがない。あの若いツバメの家の近くにも行ってみたが人の気配はなく、隣の中華料理店の主人に聞いてみても埒が明かなかった。
一週間ほど経った夜、玄関で声がし顔を出すと、あの若いツバメが立っていた。
「大変お世話になったそうで」
丁寧な口調で若いツバメが頭を下げた。尾行の真似までしている。お礼のような言葉はばつが悪い。
「ちょっとお待ちください」
彼はそう断り、あの丸いちゃぶ台を運んで来た。一度にあの夜が蘇り、一層ばつが悪くなる。
「これ、よかったら使ってくれませんか」
ツヤさんは書き置きらしきものを残していたよ

うで、ちゃぶ台は二軒隣の男前に渡して、そう書いてあったと言う。
「もし、あなたを訪ねてくるようなことがあれば、連絡していただけませんか」
渡された紙片には、尾行をしたときに調べた住所が書いてある。
「スギモト？」
ツヤさんと同じ名前が目に入り、つい声に出したわたしに、若いツバメは困ったような笑顔を見せた。
「息子です。好き勝手な母親でして、何かと言えば、息が詰まるとかうっとうしいとか理由を付けて行方を暗ますんですよ。いい歳なんだからと言っても、どうしても一緒に暮らすとは言わなくて、困っています」
頭を掻きながら彼はそのままちゃぶ台を残していった。その後姿は、どこか誇らしげにも見えた。

少女A

高知市　下元真人

初恋とはお気に入りの白いシャツにお醤油一滴ポツン、うっかりこぼしてしまうこと。
ちょっとちがうかな？　まあいいや。他にたとえが思い浮かばないし、どうせただの独り言。心の中の独り言。誰も聞いてない。
あわてて濡れタオルでぽんぽん、そしてすぐに手洗い、だけどシミになっちゃって、最初からあった模様だと無理に思い込もうとするのだけれど、でも気になって、とにかくバランスをとろうとバカな事考えて反対側にわざとポトリ、アレレちょっと違うぞとまたポトリまたポトリとお醤油をたらして、いっそ元からお醤油色の水玉模様？なんて考えていたら、うわぁ、手が滑ってお醤油ドボドボ、もう自棄のやんぱち、白いシャツじゃなくて最初からお醤油色のシャツだったって思い込もうと追加でお醤油いっぱいかけて、一度洗っ

て、よしよしこれが自分色と、茶色のまだら模様平気で着て町を歩いている、それがteenagerという生き物の恥ずかしい正体。

恋とはきれいな心のまま体が汚いことを求めること。はっきりいえば他人の心と体が欲しくなる気持ち。じゃあ恋愛は？　恋が実ってお互いの心と体を汚し合うその過程、かな。

恋にはほんのりと色があり、ボンヤリと形があり、ほのかに匂いもする。恋はとてもわかりやすい。体の目覚めに心が気付くってことだもの。恋は勝手にやってくる。私にも？

愛には形も色もないけれど、確かな証を求め合ってしまう。だから苦しくなる。何にしても恋も愛も私に見向きもせず通り過ぎる。だって私の心はすべての他人を受け付けないもの。だから私は相手のいない恋をする。そりゃあ私に優しくしようとするお人好しもいるにはいる。例えば学級委員の横田君。

そんな人間ほど苦手だ。私を邪険に扱う人のほうがまだ楽だ。どのように振る舞えばいいか、わかりやすいから。ただ俯いてオドオド、何をされてもひたすら無言を貫けばいい。どんなに惨めでも悲惨な状況でも、俯いて心の独り言呟いてればそのうち過ぎ去るから。

優しくされて、その人に嫌われないようにボロが出ないように空気を読んで緊張して踏ん張っていると、時間は立ち止まったまま先に進もうとしない。息が苦しくなる。心も体もギクシャクする。だから優しい人は苦手。

人間は自分以上に他者を愛せない生き物だ。自分のことすらそんなに愛していない私に、他人を愛することなんてできやしない。それを自覚している私に愛は近寄らない。でも私は愛をいつもこっそり探している。たぶん。

昨日を忘れようと耳をふさぎ、明日の訪れを恐れて目を瞑り、じっと今を耐え抜くことの積み重ね。いつも私は百五十年後の地球を考える。百年先は今生きている誰かが生きているかもしれないから嫌。百五十年先だと、今生きているすべての人間が確実にいなくなっているから、そこは私に

とって楽園だ。

以前の私は空気が読めないくせにいつも必死で空気を読もうとしてクタクタになって、それでも何とか周囲に合わそうとして、結局辻褄の合わないちぐはぐな言動でその場の雰囲気から浮いてしまっていた。相手がうんざりし始めた頃、まわりの空気を壊している自分に気がついて舌を千切れるほど噛んでしまう。そんなことの繰り返しだった。だから今は空気の流れてこない隅っこで本を読んでいるフリをして百五十年後を妄想している。

私がもう少しマシな子供だった頃、仲良しグループで嫌いな食べ物が話題になった。一人ずつ順番に嫌いな食べ物を発表した。私の番になった時何も思い浮かばなくて、それでも何か答えなければならないと思い、嫌いでもないのにとっさに魚と答えてしまった。グループに魚屋の娘がいることに気がつき、舌を強く噛んで後悔した。納豆と言えばよかったと悔やんだ。そんな些細なことでも、思い出すといまだに痛いほど舌を噛んでしまう。

私は教室でいつも本を開いている。私は皆(みんな)から無視されているのではない、私のほうから拒絶している。そんな言い訳のための本だ。

そして私は時々カバンの中に手を入れ、親指でカチカチカチと音を立てる。小気味のいいこの音は、壊れそうになった私の心を落ち着かせる。騒がしい教室でこの音に気がつく人はいない。私の唯一のメッセージなのに。

テレビのニュースに、私の名前が流れる日がくるだろうな、そんな予感。いやもうこれは確信。名前の後ろに容疑者、たぶん。ずっと前からそんな思いが、なにか人知を超えた予言のように私の頭に付きまとっている。

テレビのニュースに流れる私の映像は半年前の集合写真。それ以外まともな写真はどこにもないはずだから。その写真なら隣の生徒にモザイクをかける必要はない。クラスメイトよりずっと上、校舎の二階の窓のあたり、楕円の中に私はいるから。

クラス写真の撮影日は五月十六日火曜日。その前日の月曜日、昼休みにいつものように本を開いて、ただ眺めていた。すると。

「明日、来るなよな・・・バイキン」

突然耳元で囁いたサッカー部のダイスケ君。必ず一日に一回、隅っこで息を潜めている私の惨めさにスポットライトをあて、クラスを盛り上げようとするクラスのリーダー。

集団が団結するのには生贄が必要なのよね。

言葉のきつさではなく、初めて感じた男子の生温い息が、私の耳の穴の奥の無防備だったむき出しの神経に届いた。性器の奥をぎゅっと絞られたような下腹部の痛痒さ、体の奥の痙攣。下半身に力が入らず立ち上がれず、気づかれない程度の少しの失禁。

耳奥に残り続けるダイスケ君の生温い息の感触は、あの日から私の体を縛っている気がする。愛の囁きではなく、私の存在を呪う言葉が私の体のどこかの扉を最初に開いてしまった。私は命令に従い、集合写真の撮影日、五月十六日火曜日、熱のない風邪で欠席した。布団の中でぼんやりしている私の耳元に、ダイスケ君の息が一日中囁き続けた。

彼の生温い息に犯されながら、私ははじめて自分の指で女の入り口を弄んだ。けっしてダイスケ君に恋をしたのではない。私を嫌っている男子に恋をするほど、私はずうずうしくはない。頭からダイスケ君を追い出し、純粋に自分の体から快楽を搾り出そうとした。しかしダイスケ君の息は耳の奥をうろつきながら私の右手、二本の指を操縦し続けた。

五月二十日土曜日の午後、私は先生の命令で学校近くの写真館に出向いた。ダイスケ君の意図とは逆の結果、私が一番目立っている集合写真が完成した。

「ワー最悪、心霊写真、おはらい、おはらい」

そんな言葉が教室で飛び交った集合写真、私のあだ名をバイキンから亡霊に変えてしまった写真、そんな写真しかテレビ局は見つけることができないだろう。

私の強い願い、神様へのお願い、生まれてこなかったことにして欲しい。できれば何一つ生きていた証を残さず消え去りたい。それは心からの願い。いっそ母のお腹で競争した時、後ろから追っかけてくるもっとましな命にゴールを譲ってやればよかった。とにかく誰も気づかないまま静かに消え去りたい。

《それが無理なら私にだって考えがある》

興味本位なワイドショーで、幼馴染や近所のおばさん達が、私について語るだろう。

「おとなしくて、挨拶しても俯いて脅えたように通り過ぎていくのよ。なにかあると思ったわ」これは近所のおばさんの証言。

「何を考えているのか分からない、陰気な子だった。そういえば、いつも一人で本を読んでいた」これは幼馴染、よっちゃんの言葉。

「まじめな、あまり目立たないおとなしい子。あんなことをするなんて」これは小学四年の担任、谷先生の当たり障りのない言葉。きっと私の事、思い浮かばず写真で確認したけど、どんな子だったか思い出せずに答えただけ。

ああ、そうそう、私、ついに見てしまったの。怖いもの見たさっていうか。鏡に自分のアソコを映して指で広げて、ほら見て御覧なさい、お前はこんなにも薄汚い豚野郎って自分に言い聞かせるため。自分を虐めるため？　それとも虐められるため？　本当の私はどっち？　虐める快感と、虐められる恍惚の自作自演、一人二役。まあいいや。

私の愛は引っ込み思案。震える指先のもっと奥に隠れている。小さすぎて見つからないのかも。明日は思い切ってもっと奥のほうまで探してみよう。愛には色も形もないけれど、きっとわかるはず。それさえ見つかれば、もう少しましに生きていける、かも。

探しものは見つからなかったけれど、わたしのアソコ、思ったほど醜くもなかったわ。それにしても……鏡を見ながらするのってとても気持ちがよかった……他の女の子もこんなことするのかしら。あは、まさかね。

私は孤独なくせに体が汚れている。相手もいな

いのに恋をして愛を求める薄汚れた豚野郎。毎晩自分の指で愛を探している豚野郎。乾ききった私の体も、背中を反ってつま先をぴんと伸ばして絞りぬけば、お腹の奥からぽたぽたと命のシルシ、快感がたれ落ちる。

外からもたらされる喜びを私は信じない。ご馳走もスイーツも、異性との交わりも私は信じない。純粋に自分の中から自分自身で絞り出せる快感、これのみが私に許された信じられる喜びだ。夜毎お腹の奥から湧き出る快感は、たぶん明日の私から、今日一日を我慢した、生きぬいた私へのご褒美に違いない。

今日も、教室の片隅でカチカチとカバンの中で音をたて、今日こそ、という言葉を弄びながら、クラスメイトたちの白くてやわらかい首筋にどうしようもなくそそられている。

《よし今日こそ……いや、もう少し待つ？》

あっ私ってまだ、未成年よね。じゃあ私の名前は少女Ａ？　楕円写真にモザイク？　近所のおばさんも先生も幼馴染もせっかくのＴＶ出演なのにモザイクね。それにあの変声。

《なぁぁぁんだ、つまんない》

佳作一編

鷲尾山山頂にて

高知市　曽我部　仁　志

智史が、ガンの手術をしてから二か月が過ぎようとしていた。抗ガン剤の副作用もあって、鉛を巻かれたような倦怠感が体を包んでいる。ガンと診断されるまで、毎年龍馬マラソンに参加するほど健康に自信はあった。が、最近になって深夜尿意で目が覚め、何度か尿漏れで下着を汚すことが重なった。念のため泌尿器科を受診したところ、初期の前立腺ガンであることが分かった。

告知を受けた瞬間、周りの光は消え失せ、深い闇の底に落ちたように気持ちが沈んだ。医者は、初期ガンなので根治できますよ、と言ったが、再発の怖れは拭えない。仕事を休み、鬱々した気分で自宅療養する日が続いていた。

そんな状態を見かねたのだろう。朝食のあと、妻の涼子が思い立ったように言った。

「ねぇ、今日鷲尾山に登らん？」

「鷲尾山って、あの山？」

智史は、マンションの四階から高知市街越しに見える山並みに視線を向けた。

「そう、あなたも家の中に引きこもってばかりじゃ気持ちも塞ぐばかりやき、山に登ればちっとは気が晴れるがやない？」

「そうだな……」智史は秋空を背景になだらかな稜線を描く鷲尾山を眺め、「たしかに、一日部屋に閉じこもっちょったらロクなことを考えんきな……頑張って登ってみるか」

雑念を振り払うよう妻に答えた。

「山頂で食べるおにぎりは美味しいよ。私がサポートするき、まかしちょき」

涼子は、笑顔で腕を捲るしぐさを見せた。

結婚して十七年が経つ。二人に子供はいない。九年目にして涼子の胎内に待望の命が宿り、出産を待ち望んでいたが、元気な産声を聞くことはなかった。妊娠九週目での流産であった。それ以

降、涼子は心身のバランスを崩した。ふだん冗談を言ってはころころ笑う涼子であったが、すっかり口数が減り、表情にも暗い翳が差した。本来なら、弱った妻を支えるべきであろうが、その頃の智史は陰鬱な家庭からの逃げ場を探していた。

妻との生活に倦んでいた彼は、ある日、部下の女性と情を交わした。妻の目を盗み、欲情を満たすため、週末のたび若い女の体を求めた。

時は流れ、涼子の状態は徐々に回復していった。女との交際は妻に気づかれることなく続いていたが、三年ほどで清算した。夫婦の関係も元に戻っていった。

そんな平凡な日常が続いていたなかで、突然ガンの宣告を受けたのである。

手術を前に、涼子は夫を励ました。

「先生は初期のガンって言うがやろ。むしろ発見が早ようて良かったがよ。今は医学も進んでガンは不治の病やないき、心配ないって」

手術は無事終わった。麻酔から醒めると、薄く開いた智史の目に涼子の顔がぼんやり映った。智史の手を、妻はしっかり握っていた。いまは、静かに寄り添ってくれる彼女だけが、智史の支えであった。

妻が運転する車は、筆山公園の駐車場に停まった。智史は車から降り、水筒と弁当が入ったリュックを背負った。病院と買い物以外で外出するのは久しぶりだ。少しだるさはあるが、頂上までは辿り着けそう。涼子は、紺のハーフパンツ姿にピンクのジャケットを羽織っている。一見すると、女子大生に見間違われても不思議はないほど外見は若々しい。

「あなた、大丈夫?」

「ああ、思うたより体調はえい。君に付いていくき先に行きよって」

「わかった。しんどうなったら言うてよ」

登山口から山頂への道は、筆山の山腹に沿って続いている。智史の体調を気づかって、涼子はゆっくり歩く。徐々に高度があがり、左手に浦戸湾が見え始めた。

筆山を巻くように進むと、正面に目指す鷲尾山が現れた。ここまでは序の口、これから本格的な上り坂だ。細い山道は急勾配になり、足の運びも重くなり始めた。呼吸もせわしくなる。思った以上に体力が低下しているようだ。涼子が振り返って、心配そうに智史の様子を窺う。智史は「大丈夫」と目で合図し、息を整えながら杖に体重をかけ、一歩また一歩と喘ぎながら足を前に進めた。

やっとのことで、尾根に出た。登山道の脇にある丸太のベンチに腰を下ろした。水筒の水を喉に流し込み、人心地ついた。杉木立の間から差し込む木漏れ日が辺りを照らし、落ち葉の湿った匂いが鼻腔をくすぐる。

「もう一息。頂上はもうすぐそこやき」

先生が生徒を励ますように涼子が言った。智史は頷き、汗で滲んだ顔をタオルで拭った。

しばらく休んで、ふたたび登り始めた。やがて木々の間の空が開け、山頂に到着した。

頂きに立ち、景色が広がる南側に目を向けた。眼下に長浜の街、その向こうに土佐湾が陽の光を受けて鈍色に輝いている。秋の爽やかな風が汗ばんだ体を優しくなでた。智史は大きく深呼吸した。

平日とあって、山頂はふたり以外誰もいない。開けた場所に設えてあるテーブル席に弁当を広げ、妻が準備した握り飯を頬張る。塩が利いた握り飯はこの上なく美味い。全ての感覚が刺激され、生きている充足感が体中に広がった。それもこれも、妻の介助がなければ、果たせなかったことだ。

薄めのコーヒーを飲みながら、妻に言った。

「君と結婚して、本当によかった。病気して、あらためて思った。感謝しちゅうき」

「そんなこと、初めて言うてくれたね。本心から、そう思うちゅうが？」

「疑いゆうがかえ？本心に決まっちゅうぜよ」

智史は照れ笑いを浮かべた。

涼子は、智史の顔をじっと見た。

「うそ……」

「うそ？」

怪訝な表情を浮かべる智史に、涼子は声を落として言った。
「あなたは別に好きな女がおったがじゃろ。知っちゅうがよ」
「そんなのおらん」
智史は慌てて否定した。
涼子は射抜くような瞳を夫に向けた。
「私が初めての子を流産して三年経った頃やったろうか、あなたは友達と宿毛に磯釣りに行く言うて、出かけたことがあったろう。でも本当は女と高松へ行っちょたがやない？」
確かにその日、妻に偽って女と高松にドライブに行っていた。でもどうして妻は知っているのか？智史は動揺を隠すように、
「知らん、知らん。ホンマに宿毛に行ちょった」
「嘘を言ってもダメ。高速道路を利用したら翌月ＥＴＣの利用明細が送られて来るろう。それを見たら、その日、あなたの運転する車は、高知から高松まで高速道路を利用したことになっちゅうがよ」
うかつだった。そこまで妻は見ていたのか。何とか取り繕う口実はないのだろうか……、自分でも目が泳いでいるのが分かった。
「ああ、その日は急に予定を変更して瀬戸内海へ行った。思い違いしちょった……」
「誤魔化すのが下手やね。女と釣りに？」
「女？いや会社の同僚よ」
「香水を付けた同僚？若い娘が付けるような香水の匂いが車の助手席に残っちょったよ。それに、これも席の下に……」
涼子は、一本の口紅をポーチから取り出し、テーブルの上に置いた。
女が落としたものなのか――智史は決定的な証拠を突きつけられた犯人のように言葉を失った。ただ呆然と口紅を見つめた。これ以上、うその上塗りはやぶへびだ。
「昔のことやき。女とは、とっくに別れた」
智史は、いまになって過去をほじくり返す妻に不審な思いを抱いた。しかし、観念してしぶしぶ過ちを認めた。

「やっぱり、浮気をしよったがやね……。薄々気づいちょった。でも、あの頃は、それを確かめるのが怖かった」涼子は、小さく息を吐いた。「さっき、私と結婚して良かった、って言うたけど……『何よ、今さら。私を裏切ったクセに』という気持ちになった」

涼子の言葉が胸に突き刺さった。

「ごめん……」智史は力なく頭を下げた。

涼子は唇を噛んだ。やがて口を開き、

「こんど浮気をしたら離婚やき」

涼子がキッと睨(にら)んだ。

智史は、争いに負けた犬が尻尾を垂らして恭順を示すごとく黙って頷いた。

「よいしょ」涼子は重い空気を断ち切るように立ち上がった。「ああ、何だか登り足りないなあ、烏帽子山まで足を延ばそうかな」

涼子は、そう言って大きく伸びをした。

西に見える烏帽子山は、ここから往復一時間の距離にある。

「行ってき。俺はダレたき、ここで待ちゆう」

「じゃあ、行ってくるきね」

リュックを背負った涼子は烏帽子山に向け歩きはじめた。が、何かを思い出したように立ち止まり振り返った。

「わたし、ひとつだけ嘘をついちょった。さっきの口紅――助手席に落ちちょったんじゃないがよ。本当は私の物なの」

涼子は、ペロリと舌を出した。そして丸いお尻を左右に揺らし山頂を下って行った。

智史は、妻の策略にまんまと嵌(は)まったことに気づいた。力が抜けたようにゴロリとベンチに寝そべり、青空を遠く見上げた。

妻は、浮気の確証を持っていなかった。もしかしたら、最後まで夫に過ちを認めてほしくなかったのではないか――。

そう思ったところで、いまさら詮(せん)のないことである。ただ、智史は、胸のなかで引っかかっていた澱(おり)のようなものが、なぜか消えた気がしていた。

詩

夏の終わり

高知市　前田高昌

君と呼んでもいい君が
たぶんどこかに
きっといるはず
信じた四十一歳の夏

てんてこ舞の夏
いるはずの君を探した夏
よさこいの夏
メダルをもらった夏
スーパーよさこいの夏
東京で踊った僕の夏が過ぎてゆく

色々な人と知り合った夏

ほんの少しだけ
　かっこよかった僕の夏
君と出会うことができないまま
　もうすぐ夏が終わる

夜の散歩少し肌寒く　上着一枚
そして四十二歳の秋がはじまる

白いカーネーション

高岡郡四万十町　山本由美

白いカーネーションの花首を拾ったのは
夏の夕暮れの量販店

私は通り過ぎる買い物客のひとり
次々過ぎる人々の足元に
一つ転がる小さな白色
暗闇になっていくなかで
その白さはこれから夜を過ぎるには
あまりにも寂しかった

ふり返り闇に掬った白い花は
意外に重く私の心に乗った

ふと蘇った七年と半年前
最期を看取った母
医師は静かに言った
「まだ暖かい身体です、触ってあげて下さい」
私は母の身体に縋りつき
全身を震わせた

今　私の手のひらで
優しい芳香を漂わせ
純白に微笑む白いカーネーション
母の香りをなつかしみ
そっと透明の器に浮かべてみた

西行の夢

高知市　千里日月

天蓋の真ん中に
丸い月が懸かっていた
　もうこんな夜更けになっていたのか
酒瓶を枕に見上げていた
満開の巨木の桜の花が
光に透け輝いている

さわと枝が揺れると
数片の花びらが降ってきた
手を差し出し受けようとすると
花びらは掌を通り抜けていった
私の胴体も半分透け

地面が下方に見えた
見慣れた着物の男が寝ている
　私だ
桜の木が大きくざわつき
沢山の花びらが一斉に舞った
幾片もが
空中の体をすり抜けていく
その都度
様々な映像が
明晰に写し出された
　武士だった頃
　出家した頃
　放浪の旅

いつの間にか
雲に月がすっかり隠された
闇の中
　ズンッ　という衝撃とともに
背中に地面を感じた
しばらくし

瞼の裏に光が戻ってきた
重い体を起こし
私は
着物に積もっていた
桜の花びらを払った

再　生

南国市　宮本泰子

物の無い時代に生きた女達
着なくなった和服を捨てられない
それに命を吹き込むのが私の仕事

数十万円もかけて買った大島紬
そう易易とは手離せない
作務衣になってホテルで湯上りに着たら
「あら　奥様素的」と褒められ喜んだ

絞りの羽織パイピングされジャケットに
「こんなになるとは思わなかった」
若さを取り戻して帰った

卒業式に着た絵羽織はチュニックに
柄の配置が面白い
「病院へ着て行っても良いよね」
回数の増えた通院が楽しくなった

振り袖は舞台衣裳に
カラオケの発表会で歌姫になった

チャイナ服になった着物は
鏡に映し満足げに微笑んだ
日中友好に役立てば良い

眠っていた着物達を揺り起こし
令和の時代に招き入れる
若者がソッポを向いても
彼女達には宝物
私が居なくなっても服達は
ご主人様と一緒に生きて行ける
あなたはもう古着ではないのよ

ブランド品に負けない貴重な一着
オーダーメイドの衣裳なの

私　九十一歳　古びているけど
繕えば　まだ使えそう

静けさの中で

高知市
大野仁志

平日の静かな午後
電車の中にあたたかい日差し

次の停車駅が見えてくる
ホームに沢山の小学生
この静かな車内が台無し

電車が到着して
どっと小学生たちが入って来る

ああ、最悪！

しかし、静かな車内は変わらず
皆、歩きながら盛んに手を動かしている

聾学校の子供たち。

おしゃべりしないけど普通の小学生
自分の気持ちが手の動きに溢れている
小さな手がおしゃべりしているようだ
手の動きを見ながら相手の顔も見ている

ああ、純粋！

平日の静かな午後
電車の中にあたたかい気持ち
が、いっぱい

ループ

土佐市　石川志津

始まり
家族の起床
　家電と私フル回転
パートへ勤務
　スマイル疲労
帰路の誘惑
　半額弁当
愛犬の散歩
　先手が犬

夕食の準備（疲労ＭＡＸ）
　社畜ならぬ家畜気分

家族が帰宅
　ヒナの合唱

一人の時間
　追い焚き湯の癒し

布団へ帰還
　スマホと共に充電

朝　そして始まりへ

あおいろ

香美市　恩田凍羽

「かなしい」ってこころがこぼれおちた
それはつめたいしきさいをしていた
だけどぼくはそのこころを
あたためるほうほうをなにもしらなかった
だからぼくは
こぼれおちた「かなしい」ってこころが
くうちゅうにとけてきえてしまうのを
いきをころしてしずかにまっていたんだ
いつまでも

「さびしい」ってこころがないてるゆめを
はくちゅうむをみているようなかんかくで
みたのははだざむいよるのまんなか

それはあるひの「かなしい」とおなじ
つめたいしきさいをしていた
そしてやっぱりぼくはそのこころを
あたためるほうほうをなにもしらなかった
べっどのうえ、からだをちいさくまるめて
なきやむのをしずかにまっていたんだ
いつまでも

あるまっくらなよるのかたすみ
あなたはぼくのそばから
ぼくがどんなにひっしに
このてをのばしてもとどかない
とおい、とおいところへいってしまった

あなたのせいだ、そういうことにしても
「かなしい」も「さびしい」も
そうしつされることはなくて
いつでもぼくによりそうように
ここにいるから
あなたのせいにすることもままならない

ぼくはいまも
あなたがいたころのしあわせをたどってる
「かなしい」と「さびしい」をつれて

すだれ

土佐市　奥村真眉

夏のはじめにすだれを二枚
道沿いの軒にかけた
折り折り通る人達の
何のてらいも無い顔が
すだれに透けて見える

自転車の人　日傘の人　手押し車の人
すだれは卑怯もの
道ゆく人からは
わたしの姿は見えない

かつて誰の手助けもなく

姑の介護にあけくれたこの北の部屋が
いまはわたしの居場所
八十八歳で逝ってしまった姑の齢に
もう追いついてしまったこの夏
次第に鈍くなった動作と
弾みのない思考を庇ってくれるように
長い裾のすだれ

舗装路も灼けつくような昼さがり
すだれに人影の映像も途絶え
無気味なほど
静まりかえった裏通り
幾たびか風雨にたたかれたコスモスが
曲った茎から根を下ろし平然と
庭の片隅で背伸びしている

風向きの変ったことを
いち早く教えてくれる
コスモスの花が咲く頃に
道沿いの軒にかけた

二枚のすだれを仕舞おう

わたしの惑いも
すだれから払い落して

香り

高知市
宮地令子

テレビを見ていたら
あるダンサーが話していた
踊るときに大切にしていることは
「香り」であると
「香り」私は一瞬「えっ」と思ったが
ダンサーの言われた「香り」の言葉が
その後も心に残り自分なりに考えてみる

もし　誰かが何かを表現しているとき
その表現に「香り」を感じれるだろうか
それは　どのような香りだろうか
その人が醸し出す雰囲気だろうか

その人のもつオーラのようなものなのか
それに近いものが「香り」だろうか
ただ言えることは　ダンサーの言われた
「香り」とは　言葉では言い表わせない
深い意味が込められていることであろう

これは舞踏の世界だけのものではなく
日常の何気ない生活の中にも
「香り」は大切であろうと思う
この「香り」の有る無しで　その人の
生き方が違ってくるかも知れないのなら
果たして　私自身は？と問うてみる
私はどんな香りだろうか
いや　少しでも香りが感じられたなら
それはそれで嬉しいことだけれど
もし　何も無いのなら　私は悲しい

ダンサーの言われた「香り」は難しく
簡単に身につくものではないけれど
自分なりの解釈をしながら

「香り」を追い求めてゆきたい
今からでも決して遅くないと思うから
「香り」今も私の心に響いている

ああ、友よ

須崎市　倉橋孝彰

友達のふりしてくれませんか
はい？
いいえ？
承認ボタンをクリックしてください
『承認』

友達のふりして読んでくれませんか
はい？
いいえ？
いいねボタンをクリックしてください
『いいね！』

友達のふりして会ってくれませんか
はい？

いいえ？
『嫌です』

「あなた誰なんですか。」
「あなたの友達です。」
「通報しますよ。」
『通報』

友達のふりして許してください
はい？
いいえ？
あなたをブロックします
『ブロック』『ブロック』

ボクの友達は
二千人を超えています
「平気です」「平気です」「平気です」

『アカウントが停止されました。このメール
アドレスのアカウントは削除されました』

「ああ、友よ。」

ひとり語り

高知市　文月奈津

八十歳になりました
生れは昭和十三年
中学・高校無事に出て
社会人となりました

八十歳になりました
怠け寄り道　挫折も少しあったけど
町の書店に職を得て
こつこつ　こつこつ働いて
今はほそぼそ
年金暮し

八十歳になりました
父・母送り　祖母送り
二つ違いの弟も
その時私は
八歳でした

八十歳になりました　今日は私の
誕生日
金銀財に縁がなく　地位も名誉も人事の
そんな私の人生は
何色ですか　何のために生かされてるの

いいの　いいの
何色だって
白でも黒でも気にしてないから
ね　心配しないで安心して
がっかりなんかしてないから
ほらほら　見て見て
私のこころ
胸の内
明日の風が
吹いている

短

歌

芸術祭文芸賞一首

特攻を志願する者諾の字を　選択肢なき回答用紙

高知市　尾　﨑　淳

芸術祭文芸奨励賞五首

赤とんぼ仲間を呼んで会議するなんだなんだと聞く青とんぼ

土佐市立高岡第一小学校六年　矢　野　安　祐　俐

平成の時を刻みしまな板に乗せて新たな元号を打つ

高知市　髙　橋　治　光

内祝の米の重さが曽孫なりしっかり抱けと添へ書きのあり

四万十市　多賀一造

綱引きで服に模様がつきました体操服がオリジナルになる

土佐市立高岡第一小学校六年　小西海鈴

放浪の啄木父子の歌碑研く建立十周年秋晴れの朝

高知市　中山恭子

佳作六首

春が来てサクラと風がおどってるきっと二人は恋人だろう

土佐市立高岡第一小学校六年　森澤鼓十

惨禍たる南海地震来し証生家の居間を鉛筆転ぶ

安芸郡安田町　西本明浩

百歳を迎えし媼の杖の音路地軽やかに令和を生きる

高知市　浜田和香子

無いものを探してばかりの生き方をやめる　私はここに在ぁるから

高知市　池　知　さつき

南冥をはるか知覧へ還りくる螢もありて夏の夕べは

高知市　渡　辺　倶　康

大杯の一升呑みほす十五秒どろめ祭の浜はどよめく

吾川郡いの町　西　原　時　子

俳

句

芸術祭文芸賞一句

薄氷をかざして明日(あす)を見ておりぬ

高知市　島村かりん

芸術祭文芸奨励賞五句

色褪せの父の捕虜記を曝しけり

南国市　中村竹子

五臓六腑すこやかにして無月かな

南国市　澤村正彦

螢袋の中に宿かる山頭火

南国市　山崎光子

昼寝子のまだ土知らぬ土ふまず

須崎市　徳永逸夫

かたつむり葉っぱのうらがひみつきち

土佐市立高岡第一小学校五年　藤田ゆずあ

佳作九句

昼暗き雄幸の生家枇杷熟るる

高知市　松村知香

老犬の緩みしリード鰯雲

吾川郡いの町　山下正雄

生盆に新広辞苑奉る

高岡郡佐川町　浜田博子

泣いてすぐもの喰ふ葬(はぶ)り鵙高音

香南市　乾　真紀子

友のゐるただそれだけの良夜かな

高知市　浜田　節

父の日や父の汗した畑に立つ

安芸郡田野町　矢田　光央

つづれさせ蜑が炊きの石の竈

高岡郡佐川町　駒木基克

軍旗焼きし戦士の御魂ほととぎす

高知市　西込とき

サワガニが忍者のように走ってる

土佐市立高岡第一小学校六年　小西海鈴

川

柳

芸術祭文芸賞一句

筆先を整え澄んで来るこころ

高岡郡越知町　織田裕一

芸術祭文芸奨励賞五句

饒舌な地球に神の檄が飛ぶ

香美市　森本幸美

理由(わけ)あって雲の後ろを通る月

吾川郡いの町　岡林裕子

許そうかあんな大きな虹が立つ

高知市　桑名知華子

せんぷう機どんな事にも首をふる

土佐市立高岡第一小学校五年　髙橋清花

すきやきはのんびりできぬ戦場だ

土佐市立高岡第一小学校六年　松谷侑飛

佳作八句

手のひらにあるわくらばの生と死と

高岡郡四万十町　沖　すが子

糟糠の妻の反旗が翻る

安芸市　大　坪　邦　枝

まだ胸のこぶしは握りしめたまま

四万十市　近　藤　糾

繕った恋のお薬手帳出す

高岡郡四万十町　熊谷敏郎

姥捨の山へ高速道のつく

吾川郡いの町　西原時子

娶(めと)らずに生きた男の風の音

高知市　髙橋治光

台風が口ぶえふいて木をたおす

土佐市立高岡第一小学校四年　川　﨑　夏　歩

ガタガタと手あらな風のノック音

土佐市立高岡第一小学校五年　山　本　咲　愛

審査評

短編小説審査評

今年の応募作品数は三十七編。十二歳から八十七歳まで、幅広い年齢層からの応募があった。ただ、年ごとに応募作品数が減少していることや、若年層からの応募の少なさが気になった。文学をすることへの関心の薄さ、その反映であれば寂しいものを禁じ得ない。来年以降、瑞々しい作品を期待したい。

審査の結果、次の四編を入賞とした。

「ノエルのできごと」 今から二十二年前、僕は東京で大学生活を送っていた。書道サークルで、マリアンヌ、というフランスの女子留学生と知り合った。クリスマスイブ、郷里行きの深夜バスに乗り遅れた僕は、四谷駅の構内で、ミサ帰りのマリアンヌに声をかけられる。……爽やかな印象を残す作品であり、好感が持てる。読後、心地よい余韻のようなものを感じた。若さとは、悔恨の日々を置き去りにしてゆく季節なのかもしれない。

「自立癖」『年寄り長屋』に、厚化粧の女が入居する。一見、玄人風だが、夜の仕事に出かけている様子はみえない。その代わり、ツバメらしい若い男が出入りしている。ある日、その女から、ツバメらしい男のあとをつけてくれないか、と頼まれる。……意味深な展開もあって読ませる作品であるが、最後の一文について、意味が分かりかねる、という指摘があった。

「少女A」 わたしはクラスで浮いている女子。ある日、わたしを笑い者にするダイスケ君の生温い息が耳もとに触れた。翌日、学校を欠席したわたしは、その息に刺激され、布団のなかで性器を弄ぶ。……多感で、揺れ動く少女の内面を、まっすぐに描いて刺激的な作品である。ただ、妄想ではあっても、世間を騒がせる事件を起こし、未成年だから少女A、写真もモザイクで済む、それがつまんない、と語らせることには疑問が残った。

「鷲尾山山頂にて」 智史は、病院で、初期の前立腺ガンだと診断される。気が滅入っていた智史に、妻の涼子が、鷲尾山に登ってみないか、と誘う。その山頂で、涼子から、わたしが流産したとき、浮気をしたでしょう、と問い詰められる。……少しドキリとして、そのあとニンマリとする面白い作品となっている。ただ、枚数の少なさのためか、どこか類型的なところがあり、新鮮味に欠けたのは残念であった。

（審査員――杉本雅史、米沢朝子、文責・若江克己）

詩審査評

応募総数は四十七編。文芸賞一編、奨励賞、佳作、それぞれ五編。詩とは、言葉による感動の表現だと言われる。何か初めてのものに出会った時の、思い掛けなさ、面白さ、喜びや悲しみ、不思議感覚…その心の揺らぎを直截に述べる。先の県展日本画の審査員だった宮いつき氏は、制作の要点をこんなふうにまとめていた（高新十月二十二日）。「――作品を描く時、全体を大きく見ながら制作してもらいたい。そして〝上手〟であることは大切だが、もう一つ〝面白い〟という魅力がどうやったら出せるかを追求してほしい。そのためには何を見せたいのかを言い切る。――」これは、詩作の場合にも当てはまる。

今回の文芸賞、前田高昌「夏の終わり」は、まさに何が言いたいのか読めばだれにでもわかる。詩のかたち全体がシンプルである。「四十一歳」という年齢の設定も妙。会えるはずの人に出会えないまま終わる夏、さびしい、わびしい、などの主観語を使わずに、新しい季節の始まりだけを告げて作品を完結したのも後味がいい。また、よさこい祭りという具体性、地域性も、作品をよりリアルなものに仕上げるために効果的である。

奨励賞、山本由美「白いカーネーション」。雑踏に落ちていた一つの花首。人人に見捨てられる小さなもの、弱いもの、無価値だと思われるものに目をとめ、そこに新しい意味と価値を見出すのも、詩精神の大きな働きである。千里日月「西行の夢」。西行といえば「ねがはくは花のしたにて春死なん」の歌で有名。その生涯に思いを馳せながら、自在に幻想を広げた異色の作品である。宮本泰子「再生」。使い古した和服を仕立て直して着る、ときめき。結びの「私　九十一歳　古びているけど／繕えば　まだ使えそう」が面白い。大野仁志「静けさの中で」。電車に乗り込んで来た小学生の一団、その予想外のふるまいに心を和ませた、気付きのひとときを述べる。石川志津「ループ」。一日二十四時間の行動を八コマに区切って表現。わずか二行ずつだが、その一つ一つの押さえ方が本質的でわかりやすいし、ユーモアも感じられる。

作品ができ上がった時、全体を見てむだな言葉を削り落とすことが大切である。書いた本人にとっては大事、面白い、と思われることでも、事情を知らない読者にとっては少しも面白くない、ということがよくある。

（審査員――小松弘愛、長尾軫、文責・林嗣夫）

短歌審査評

今年の応募は一二一人から三一七首の応募があった。学校からは葉山中学校・高岡第一小学校からの応募があり、慎重審議を重ねた結果次のように入賞六首を決定した。

文芸賞

特攻を志願する者諾の字を 選択肢なき回答用紙　尾﨑　淳

特攻を志願させる方法として、承諾以外に選択できない回答用紙でもって未来ある若者を特攻へ駈りたてた時代を、忘れてはならない作者の切なる思いが伝わってくる一首である。余計なことは何も言っていない確かさである。

文芸奨励賞

赤とんぼ仲間を呼んで会議するなんだなんだと聞く青とんぼ　矢野　安祐俐

十一歳の作者に映った風景を力まず素直に表現して好感。青とんぼのなんだなんだと疊みかけた言葉は一首を明るくして、あざやかである。

平成の時を刻みしまな板に乗せて新たな元号を打つ　髙橋　治光

二〇一九年五月一日新元号令和を詠んだ一首。まな板に焦点を絞り、新元号を取り合せたところに、この歌の意外性と歌意の深さを感じる。

内祝の米の重さが曽孫なりしっかり抱けと添へ書きのあり　多賀　一造

孫歌曽孫歌は甘くなると言ふが、この一首は離れ住む家族の温もりや心遣いがみえ、ゆとりの中に何かヒューモアさえ感じる。

綱引きで服に模様がつきました体操服がオリジナルになる　小西　海鈴

地域に伝わる伝統的な行事、大綱引きに参加した作者は十一歳。散文調であるが、誇らかに歌いあげて好感。

放浪の啄木父子の歌碑研く建立十周年秋晴れの朝　中山　恭子

啄木父子の歌碑は県内外の短歌愛好者により十年前現在の高知駅南広場に建立された。十周年にあたる、今年記念行事に携わる作者はよろこびを結句に収めた絶妙な明るさがある。

佳　作

森澤　鼓十（土佐市立高岡第一小学校六年）
西本　明浩・浜田　和香子・池知　さつき
渡辺　倶康・西原　時子

（審査員――市川敦子、梶田順子、文責・中野百世）

俳句審査評

応募句数七百十七句、応募者二百五十五名十歳から九十一歳までという巾の広い文芸で熱気溢れる選考会となった。

文芸賞

薄氷をかざして明日を見ておりぬ　　島村　かりん

明るい明日が見える希望の一句だと受け止めた。五句中、二句が選に入り意見交換に時間をかけ協議の結果入賞とした。

文芸奨励賞

色褪せの父の捕虜記を曝しけり　　中村　竹子

捕虜記がある・・・・ということは無事に帰られての事でしょう。忘れてはならない歴史がここにある。幼き日の記憶を今、ここにしっかりと受け止めて、後世へ引き継ぐ意義がここにある。

五臓六腑すこやかにして無月かな　　澤村　正彦

三位一体。体全体健やかに月を賞でる一句。今宵の無月を由として、喜びを一気呵成に謳い上げている佳句。老いも若きもこうありたいものだ。

螢袋の中に宿かる山頭火　　山﨑　光子

俳味の原点をつかんだ感覚的な句。物に託した作者の俳心から生まれた句と読んだ。選者それぞれの思いがあるが協議の上入賞句となった。

昼寝子のまだ土知らぬ土ふまず　　徳永　逸夫

五感の仂きの一つ「触」が一句の焦点で孫俳句の甘さに溺れず成長を見つめる句に注目。

かたつむり葉っぱのうらがひみつきち　　藤田　ゆずあ（十歳）

言葉の流れるようなリズム、五七五に溶けこんだ夢いっぱいの句を入賞とした。

佳作にも子供の句を一句入賞とした。選者で話し合いの結果である。

（審査員――橋田憲明、味元昭次、文責・植田紀子）

川柳審査評

今年の川柳部門の応募総数は四百七十三句、応募人数は百八人で前年とほぼ変わらなかった。今年の応募作品は例年よりも、幅広い表現が目立った。今年もジュニアの応募が多く、新鮮な表現が目に留まった。今年は二人で審査にあたり、次のように受賞作を決めた。

文芸賞は次の一句。

筆先を整え澄んで来るこころ　　織田　裕一

筆をとる時、日常の慌ただしさ、わずらわしさを忘れる。硯の上で筆先を整えている時に、日常から抜け出た自分を感じる。ふーと息を整え、白い紙に筆を運ぼうとする。私たちの生活の中の迷いや怒りや切なさが、筆をとるときに澄み切ってくる。筆先を整える時、私のこころをリセットしているのだ。しみじみとした佳句。

次に、文芸奨励賞五句。

饒舌な地球に神の檄が飛ぶ　　森本　幸美

ひとはどうしてこんなに自分、自国中心主義になったのだろうか。声高に自国のためと指導者は饒舌で、ツイッターという方法で世界に発信する。作者はこの風潮を憂える。神様から「あなたたちは何をしている。目を覚ませ」と檄が飛んでいるのが聞こえないのかと嘆く。社会性のある迫力のある句。

理由あって雲の後ろを通る月　　岡林　裕子

自然現象を人間臭く表現するのが、川柳の川柳たるところ。月が雲の前を通らないのは科学的には当たり前のことだが、ひとの営みのなかで月が陰ることは、こころに変化を生む。理由(わけ)あってと作者はいうが、それはあなたのこころに問うてみたらどうかと読者を試している。

許そうかあんな大きな虹が立つ　　桑名　知華子

自然に包まれると、ひとは優しくなる。大きな虹を見ながら、自然の懐の広さを感じる。ひとを許すのは、理屈の中では無理だろう。話し合いでけりをつけても、こころはついてゆけない。「そんなことは小さい」と、自然の中で思えた時にこそだ。「あんな大きな」がやわらかさを際立たせている。

せんぷう機どんな事にも首をふる　　髙橋　清花

ずっと首を振り続けているせんぷう機。自分のこころに芽生えてきた、「うん」と言えない気持ち。扇風機なんかずっと「ううん、そうじゃない」と反抗を続けているじゃないかと、くすっと笑っている小学生の姿が目に浮かぶ。

すきやきはのんびりできぬ戦場だ　　松谷　侑飛

家族は四人だろうか。野菜も入った、肉も食べごろになってきた、「さあ、どうぞ」の声に、一斉に箸が動く。自分は大好きな肉をとろうと思ったら、向かいからも箸が伸びてきて、負けてはいられない。微笑ましい、家族の夕食風景が見えてくる。

（審査員――窪田和広、文責・小笠原望）

令和元年度高知県芸術祭
文芸賞作品募集要項

一、趣　　旨

高知県芸術祭文芸賞は、広く県民の皆様から作品を公募して、すぐれた作品を顕彰し、地方文化の発展と本県文芸の振興を図ることを目的としています。

二、主　　催

高知県・（公財）高知県文化財団

三、主　　管

高知県芸術祭執行委員会
（事務局　（公財）高知県文化財団内）

四、公募作品の部門

短編小説　一人一編
詩　一人一編
短　歌　一人三首以内
俳　句　一人五句以内
川　柳　一人五句以内

五、締　切　日

令和元年九月三十日（月）当日必着

六、作品送付先

〒七八一―八一二三　高知市高須三五三―二
（公財）高知県文化財団内
「高知県芸術祭執行委員会事務局」あて

七、発　　表

令和元年十一月上旬に本人及び報道機関あてに通知します。（令和元年十二月十五日に表彰式を行います。）

八、選　　賞

・短編小説
「高知県芸術祭文芸賞」一名　表彰状と副賞
「高知県芸術祭文芸奨励賞」二名　表彰状と副賞
・他の部門
「高知県芸術祭文芸賞」一名　表彰状と副賞
「高知県芸術祭文芸奨励賞」五名　表彰状と副賞
その他、佳作が選出される場合もあります。
佳作には表彰状と副賞が授与されます。

九、応募時の注意事項

・類似（類想）作品の存在が明らかになった場合や、盗作が疑われる場合は、賞の発表後でもこれを取り消すことがあります。その場合に発生した著作権侵害に関わる問題は、応募者の責任となります。また、取り消しにより生じた損害（経費）については応募者に負担していただきます。

十、応募条件

未発表作品に限り、応募者は高知県在住者に限ります。

＊私的な会や学習会で発表した作品、メンバー内での回覧、資料とするための目的で活字化した作品は「未発表」とみなします。

＊その他、右記の基準等に則して、事務局が判断する場合もありますので、ご了承ください。

十一、作品への記載事項

①部門名　②氏名（フリガナ）＊ペンネームご使用の場合は併記　③住所　④電話番号　⑤年齢

を必ず明記してください。記載場所等は部門ごとに異なります。

鉛筆またはシャープペンシルの場合は、HB以上で濃くはっきり書いてください。

十二、部門ごとの注意事項

短編小説

■作品本文は四百字詰原稿用紙十枚。

■パソコンの場合、二十字×二十行で設定してください。

■必ず、作品本文にページ番号をふってください。ホッチキス留めは不要。

・一枚目…タイトルを明記

・二枚目～十一枚目…作品本文

・十二枚目…部門名・氏名・住所・電話番号・年齢を明記。

詩

■作品本編は四百字詰原稿用紙二枚、三十七行以内。

・一枚目…一行目上方に部門、作品名、二行目下方に氏名を記入。

（三行目はあけて）四行目から作品本文を書き始めてください。

・三枚目…住所・電話番号・年齢を明記。

短歌・俳句・川柳

■通常はがきを使用してください。

※学校から、まとめて応募の場合は、はがきサイズの用紙へ記入しても可。

その際、ご担当教諭名を封筒に記入してください。

■全部門とも自由題。作品は楷書・タテ書きで書いてください。

・はがき表面に部門名を必ず記入してください。

・氏名・住所・電話番号・年齢は作品末尾に記入してください。

＊応募作品は返却しません。

＊個人情報は、運営上の管理及び本人への連絡の用途に限り、利用させていただきます。

ただし、入選作品については、在住市町村名、氏名、年齢を公表します。

＊入選作品の著作権は、高知県及び（公財）高知県文化財団が所有します。

十三、審　査　員（五十音順）

短編小説：杉本　雅史　米沢　朝子　若江　克己

詩　：小松　弘愛　長尾　軫　林　嗣夫

短　歌：市川　敦子　梶田　順子　中野　百世

俳　句：植田　紀子　橋田　憲明　味元　昭次

川　柳：小笠原　望　窪田　和広

十四、問い合わせ先

「高知県芸術祭執行委員会事務局」

（公財）高知県文化財団内

（ＴＥＬ　〇八八―八六六―八〇一三）

二〇一九年十二月十五日　発行

編集発行　高知県芸術祭執行委員会

事務局　高知県高知市高須三五三－二

（公財）高知県文化財団内

印刷所　高知市城山町三六

西富謄写堂

（非売品）

文芸賞